

漫画における剣豪のジェンダー的表現

——『バガボンド』と『風光る』の比較に基づいて(2)——

シュミット・クラウディア・カロリネ

1. 序論

- ①問題提起と仮定
- ②今までの研究状況
- ③研究方法

2. ターゲットとなる読者のグループとジャンルの区分

- ①ターゲットとなる読者のグループ区分
- ②時代劇漫画の一覧

3. 選択と構造的分析

- ①漫画の選択
- ②内容の構造
 - (1)『風光る』の紹介
 - (2)『バガボンド』の紹介
- ③組み立てとデッサンの構造
 - (1) 最初の印象
 - (2) デッサンの構造

4. 少女漫画における沖田総司

- ①歴史上の沖田総司
- ②『風光る』における沖田の人物分析
 - (1) 沖田の人物のコード
 - (2) 沖田の社会生活の分析

* 本学文学研究科博士後期課程

キーワード：漫画，サムライ，ジェンダー，沖田総司，宮本武蔵

- (3) 武士の生活・沖田の武士道
- (4) 恋愛・沖田の保護者としての役割
- (5) 恋愛・「風になりたい」

③歴史上の人物と漫画の登場人物の比較1—沖田総司の場合—

(以上第1回)

5. 少年漫画における宮本武蔵

①歴史上の宮本武蔵と諸説

②『バガボンド』における人物分析

- (1) 宮本の人物のコード
- (2) 宮本の社会生活の分析
- (3) 武士の生活・流浪生活
- (4) 武士の生活・精神的な戦い
- (5) 恋愛・宮本の恋との関係
- (6) 武士の生活・敵の役割

③歴史上の人物と漫画の登場人物の比較2—宮本武蔵の場合—

6. 『風光る』および『バガボンド』の描写の比較

- ①一般的な比較
- ②社会生活の描写の比較
- ③問題解決と精神的な葛藤の比較
- ④武士としての役割の比較
- ⑤性と恋愛
- ⑥歴史的文脈の比較

7. 歴史的事実との差およびターゲットとなる読者からの影響

- ①読者と登場人物との一体感の基礎
- ②身体的力と美学
- ③道徳と論理
- ④保護者としての役割の矛盾
- ⑤社会からの逃げ道
- ⑥契約的考察

8. 結論

5. 少年漫画における宮本武蔵

①歴史上の宮本武蔵と諸説

宮本武蔵¹⁾の人物像には、事実と風説ともいふべきものが混合していて、どこまでが真実なのか判断しにくい。特に『バガボンド』の場合は伝説や風説が多く取り上げられ、それが一般に知られている宮本像の上に加えられている。また、吉川英治著の『宮本武蔵』が元になっているため、吉川のもつ宮本像も多岐に渡って影響している。宮本は沖田と同様に、生まれた年もはっきりしていないし（1583年とも1584年とも推測されている）、沖田よりもさらに謎の多い宮本は、出身地すらもまた正確には知られていない（これも岡山県とも兵庫県とも推測されている）。宮本は戦国時代の混乱の世の中に育ち、父親（養父とも言われている）に十手を学ぶ。父親が行方不明となり、親戚である坊主に育てられ、剣道を教わる。13才で初めて戦いの相手を殺し、それから間もなく、流浪の旅に出る。1600年には関ヶ原の戦い参戦し、その後、戦乱を生き延びた宮本は上洛し、剣道場で名高い吉岡一門を挑発する。吉岡との戦いは負けた父親の復讐のためであったと推測されている。さらに続ける流浪の生活の中で、宮本は宝蔵院流の僧兵や柳生流の剣士、鎖鎌で有名な宍戸梅軒などと刀を交わす。最も有名なエピソードは巖流島での巖流佐々木小次郎との勝負である。宮本は60回の戦いの中で一度も負けなかったと『五輪書』に書いている²⁾。しかし、この巖流島での勝負は、宮本の他の戦いと同様に、歴史的事実であるかどうかすら本当のところはわかっていない³⁾。1614年と1615年に、宮本は大坂冬の陣と夏の陣に徳川方として参加したと言われる。1634年には養子とともに九州に移り住んで、細川家で剣術を指南する。宮本は剣術以外にも多才であり、美術を学び、特に晩年になって、いくつの墨絵や木彫り等を作成し、1643年に瞑想のため引きこもり、剣術書である『五輪書』を作成

する。そのなかで案出した二刀流は有名である⁴⁾。

宮本が駆け抜けた時代は、戦国時代から江戸時代へと移り変わってゆく激動の時代である。平和を取り戻した江戸時代では、生き残るための戦いは不要となり、剣術は精神的武道に代わる。その時代の変容は、宮本を精神的に苦しめたと推測されている。宮本は社会を避け、風呂すら一度も入らないほどだったという説もある。宮本の流浪に関するエピソードは他にいくつもあるが、宮本は他人が通常使わない戦略（わざと遅刻することによって相手をイライラさせる。また風呂に入らなかったのも悪臭で相手を近づけないためだったという）を用いた。真剣を使わず、木刀で戦う、相手を死に追いやるまで戦いを続ける、などがその例である⁵⁾。



図7 宮本武蔵肖像⁶⁾

漫画における剣豪のジェンダー的表現



図8⁷⁾

②『バガボンド』における人物分析

(1) 宮本の人物のコード

『バガボンド』における宮本の分析を本稿第一回の沖田の分析と同様に行うが、キーワードの量が『風光る』とは異なるため、本章の区分は沖田の場合とは少し異なっている。最初に、「宮本の登場人物のコード」としては、顔は角ばっており、表情に緊張感がただよっている。目をみると、大きくて丸い沖田の目とちがって、宮本の目はアジア系統のものであることも分かる。さらに、その視線は一点（読者や話し相手）に集中している。荒々しい気質の持ち主である宮本は、ストーリーが進むにつれて、大人に成長し、表情も落ち着いてくる（図8）。

(2) 宮本の社会生活の分析

一匹狼であるという設定は、宮本の代表的な特徴ともいえる。人間よりも、彼をとりまく大自然が宮本に影響を与えている⁸⁾。宮本の社会生活は、現実だけではなく、その妄想の中に人物や姿が徐々に表れるようになって、彼の迷いが表現されることになる。特に亡くなった父親やアドバイスしてくれる二人の師（宝蔵院胤栄および柳生石舟斎）は宮本の妄想の中によく登場する⁹⁾。図9では、宮本にとり憑く父親の幻影の恐ろしさがわかる。現実の世界の人間の中では、宮本にとって愛しい人もいるが、彼に最も大きな影響を与えるのはむしろ戦いの相手である。その上、宮本の内面には大人になるにつれて変化が起こり、いつも一匹狼だった宮本が、少しずつ人間に関わってくるようになる¹⁰⁾。宮本が心を開いて相談できる相手として、沢庵和尚があげられる¹¹⁾。



図9¹²⁾

(3) 武士の生活・流浪生活

宮本は流浪しつつ、武士として「天下無双」、すなわち最強の剣豪を目指す。『バガボンド』は戦いやチャンバラに重きを置くより、実は未熟な宮本が大きく成長してゆく過程を物語っている¹³⁾。未熟だった宮本がまず学んだのは自分の無力さである。そして、死ぬことを覚悟していても、戦いの最中に実際に死にそうになった時、死ぬことへの底知れぬ恐怖を学ぶ¹⁴⁾。ここで彼の流す涙は重要なポイントである。始めは強さばかりを求めている野蛮な性格の宮本が、成長の過程で沈着な性格となり、戦いの場合には、まず戦略を練って備えるようになる¹⁵⁾。その成長の過程で、宮本は「天下無双」ということばなど無意味であり、周辺の自然と調和して一体化すべきだという「理」を悟る¹⁶⁾。さらには、「無刀」という心理的狀態を習得するのである(図10)¹⁷⁾。「無刀」というのは、切り込む瞬間、剣士の刀が相手にも、さらには自身にも見えなくなる状態である。そこから



図10¹⁹⁾

生じる心理的優越により、戦いが始まる前にすでに勝負の結果が分かる。戦いの結果は戦いに先立って決まっているため、宮本は戦いの必要さを疑問視し始める¹⁸⁾。

(4) 武士の生活・精神的な戦い

宮本は自分が抱く剣豪の理念に対して、次第に疑問が生じてくる。「天下無双」を目標に戦い続け、殺し合いのらせん状態に入り込んでしまう。さらに、天下無双を名乗っていた父親への怒りが噴き出し、世間から人殺しと恨まれることが、宮本を悩ませるようになる²⁰⁾。図11aには自分への怒りが表現されている。怒りは泥のようにも見える。そして、その中から出てくる子供の頃の自分が恐ろしい顔で、大人になった宮本を見る。宮本の体についている泥の量は、彼の悩みの深さを表す。次の図11bでは宮本の内面から「殺し合いのらせん状態」への疑問の声が湧き出てくる。その結果、自分自身の抽象化した精神的苦悩の中で葛藤するようになる²¹⁾。そうして成長と逆戻りを繰り返すが、宮本は最後まで刀から離れることはで

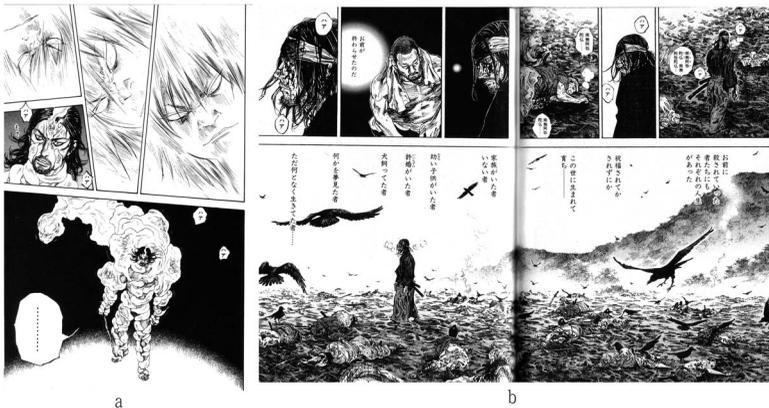


図11²³⁾

きない²²⁾。

(5) 恋愛・宮本の恋との関係

宮本の恋愛生活の分析には、幼馴染のおつうが重要となってくる。宮本は彼女への恋を認めるが、流浪生活を続けるため、恋人（おつう）を切り捨てる²⁴⁾。『バガボンド』の女性の一般的な描写は色っほいが⁸⁾（ほとんどの女性は性的な関係において登場するため）、おつうもその例外ではないものの、宮本を追い求めながらも、彼の流浪の邪魔立てをすることなく、無私な性格の人物として描かれるために、大変古風な女性となっている²⁵⁾。

(6) 武士の生活・敵の役割

『バガボンド』では、恋人よりライバルの方が重要な役割を果たす。宮本に匹敵する剣士である佐々木小次郎とのあいだには奇妙な心の交流がある。クライマックスとなる巖流島の決闘に先立って、両者は「枯れ枝の戦い」（冬の庭で枯れ枝を打ち交わして遊ぶようにして戦う）を通して、心と心で語り合い、お互いに通じ合う²⁶⁾。『バガボンド』における佐々木は吉川の小説と違って、耳が聞こえないことになっているため、他の人々と同じようには言葉で話しができないという設定になっている²⁷⁾。『バガボンド』の中では、宮本と佐々木は戦いを通して心の友となってゆくため、吉川の描いた巖流島の決闘は、もはや必要でないのではないかという疑問が生じてくる²⁸⁾。

③歴史上の人物と漫画の登場人物の比較2—宮本武蔵の場合—

歴史上の宮本像よりも吉川の小説あるいは伝説が『バガボンド』に強い影響を与えている。伝説と『バガボンド』における宮本の最大の共通点は、流浪の戦いの場所と相手である。さらに最大の違いは、父親との関係であ

り、伝説では父親の敵を討とうとする孝行心が表に出てくるのに、『バガボンド』では父と子の対立が描かれ、子は父親への怒りをあらわにして父親を打ち倒そうとし、父親は恐ろしい姿をとって前に立ちふさがる²⁹⁾。従って、漫画のなかの吉岡との戦いは伝説と異なり、仇討ちの目的で行われたわけではない。『バガボンド』の宮本は流浪のさい、できるだけ人を避けて山野で寝泊まりしたりするが、これは伝説とも符合している。ただ、余談かもしれないが、井上は宮本が入浴するシーンを描いていて、これは宮本が一生に一度も風呂に入らなかったという有名な伝説とはくいちがっている³⁰⁾。

剣豪の理念に関しては、宮本がつねに強さを求めた点では、『バガボンド』と伝説で共通している。伝説上の宮本は陰険な戦略を使うことを厭わない。『五輪書』においても「兵法三十五か条」において、さまざまな心構えについて述べる。それに対して、『バガボンド』では一つの虚構化された技（無刀）しか出て来ない。しかし、流浪中に訪ねる場所は大まかにではあるが、諸伝説と一致している。

最後に、2006年のインタビューで、井上は歴史上有名な巖流島の戦いの必要性を疑っている。宮本と佐々木とは心の交流により、勝負の必要はなくなってしまう。『バガボンド』において巖流島の戦いはもはや必要ではないであろうと思われるが、現在の漫画の展開次第ではと、井上は意見を変え、歴史に従って巖流島の戦いまでを描くかもしれない³¹⁾。

6. 『風光る』および『バガボンド』の描写の比較

①一般的な比較

本章では4章と5章の分析結果を抽出し比較する。少年漫画と少女漫画の紹介するサムライの男性像の共通点と相違点に焦点を当てる。そのためにもまず、ジェンダー（gender）の概念を定義する。ジェンダーとは、本来

漫画における剣豪のジェンダー的表現

の性別 (sex) とは別に、社会的文化的な性差も包含する概念である (例えば性別によって衣服も異なるなど)³²⁾。従って、本章においては登場人物の比較を行い、漫画における「サムライ」に関するジェンダー的概念を探り、続く7章では社会的な性差も考えることにする。

まず、「登場人物のコード」における分析の結果を考慮し、沖田と宮本のニュートラルの表情を比べると、二人はともに武士でありながらも、宮本はスポーツ選手に似た体型で筋肉質の男性の美学を表現している。その一方で、沖田は若さと美少年のもつ中性性が特徴である。言葉遣いも非常に異なり、二人とも言葉遣いでその性格がよく分かる。沖田に関しては、敬語を使う場面が多いが、注目しているのは沖田の言葉の不器用さはストーリーを発展させる力の一つになっていることである。『バガボンド』の場合は普段から言葉よりアクションが多いが、その会話をみると、宮本は荒々しい男性言葉を使うため、沖田とは好対照をなしている。

②社会生活の描写の比較

「行動のコード」として分析した社会生活を比べると、二人は最初の設定から相反することが分かる。『風光る』は新選組が舞台であるため社会的環境が大半を占める。ところが、『バガボンド』は流浪のストーリーのため、一匹狼主義が宮本の特徴であり、社会生活においては戦いの相手が一番影響をおよぼす。その社会的環境の密度はジェンダーの特徴を示すと考えられる。少女漫画の殆どのジャンルでは社会が関心の大半を占め、『風光る』においてもそれに同様である。『バガボンド』の場合、戦いの相手の役割が重要であるのは、一般の少年漫画のジャンル (アクションが特徴であるため) の枠の中にあるためである。宮本には社交性がほとんどなく、社会性が欠如しているが、彼に社会道徳を厳しく説諭する人物がしばしば登場する。つまり、少女サムライ漫画では社会環境が最重要である

のに、少年サムライ漫画では二次的なものに過ぎないということになるであろう。

ここでフロイトの深層心理学を援用してみたい。フロイトによれば、人格は三つのカテゴリによって行動する。それは「超我」、「自我」、そして「エス」である。「超我」は道徳と理想に応じて行動するのに対し、「エス」は衝動と欲求に応じて反応し、「超我」によって阻止される。さらに、三つ目は人の本当の人格を表す「自我」である。「自我」は「超我」と「エス」の間のバランスを取らなくてはいけない³³⁾。日本にも人格を説明するのに独特なカテゴリーが存在する。すなわち「本音」と「建前」というカテゴリーがあり、それは一見すると、フロイトのカテゴリーに似ているようにも思われる。「本音」は「エス」あるいは「自我」に近いと考えられ、人に固定しているが、「建前」は人の行動を規制する点で「超我」に似ているものの、人に固定していず、社会が指示する道徳に応じる行動であり、意識的に使う行動パターンであろう³⁴⁾。沖田の場合は新選組の法律や武士の理念が「建前」になっているが、宮本の場合は、たとえ他人がどのような思想や道徳を持っていたとしても、宮本は沖田のように「建前」自体を持ってはいず、それに縛られる環境はない。宮本の人格はフロイトのいう、欲求に応じて行動する「エス」に似ていると考えよ。その点はそれぞれの漫画における描写のジェンダー的な差異（男性性／中性性）によるのであろう。ところが、「恋愛」における関係は一般の社会生活と異なり、沖田も宮本も「超我」に従って自分の欲求を否定しながら行動する。そして、少年サムライ漫画の代表である宮本は「エス」が特徴で、少女サムライ漫画の代表である沖田は「建前」と「超我」が特徴であるといえよう。

さらに、『バガボンド』は自己形成が基軸になり、『風光る』は新選組の歴史を基軸として、それぞれの隊士たちのストーリーを展開している。ところが、宮本の場合は彼のもつ「殺気」が周囲から厳しく批判されるのに

対し、沖田がもつ厳しい（古くさい）武士道は周囲から「野暮」と言われることで済んでしまう。二人は社会環境と行動がそれぞれ背反するが、二人とも考え方が周りの人々とは異なるというところに共通点がある。

③問題解決と精神的な葛藤の比較

二人の悩みの内容とその解決、さらにはその課程で起こる精神的な葛藤を中心に比較する。①と②と同様に、読者のジェンダーに則して探り、さらに次の表に悩みの内容をまとめた上で比較する。すると、宮本と沖田とは、それぞれの悩みの内容に差があることが分かる。悩みの内容も行動パターンも異なり、さらに二人の成長過程も非常に異なっている。沖田は異性への恐怖と、弟子の神谷を守るべきか、信頼して放任するべきかという保護者としての悩みをもち、また忠義と恋愛のどちらを優先するべきかを悩んでいる。恋愛関係と武士道の間で悩んでいるといえる。宮本の場合、自分自身への怒りと、自己の身体的発展とそのため不可避である殺し合いのらせん状態に対する悩みが中心となっていて、精神と肉体の自己形成のために行う殺人という不倫理と倫理の葛藤が語られる。さらに、流浪の生活を続けるべきか恋愛をとるかにも悩んでいる。ストーリーの中心となる問題点が読者の好みに合わせて設定されているとすれば、恋愛か武士道の理想かという葛藤は女性読者にとっても興味深いテーマであるかもしれない。一方で、自己形成については女性よりも男性読者のほうが興味を持つといえよう。

問題の内容だけでなく、その克服の仕方も異なる（表を参照）。宮本は現在の段階では一つの問題しか克服してはず、沖田は三つの問題点のうち二つを克服している。さらに、その克服するための解決方法も異なり、沖田は（神谷のおかげで）消極的にも積極的にも解決方法（妥協）を見つけたことができたのに対し、宮本の場合は、主人公は深く思慮（妄想の形で

	沖田	宮本
精神的葛藤の内容 I	異性（女）への恐怖	自分への怒り
克服 I	克服する	克服の過程
克服の仕方 I	消極的 (神谷の男装のおかげ)	—
精神的葛藤の内容 II	神谷を守るべきか, 信頼すべきか	身体的発展と殺し合いの らせんとの関係
克服 II	部分的	らせんを認識したが, 克服できない
克服の仕方 II	積極的	消極的— 選択の可能性はない
精神的葛藤の内容 III	忠義か恋愛か	流浪の生活か恋愛か
克服 III	克服する	克服
克服の仕方 III	妥協	消極的— 選択の可能がない

表 沖田と宮本の精神的葛藤

登場する)するものの、解決はみつからない(殺し合いのらせん状態から出られないなど)。つまり、宮本には「運命」からの逃げ道はないようにみえる。また、恋の悩みをみると、沖田は武士の忠義と恋愛とのバランスをとることによって、妥協することに解決を見つけるが、宮本は逆に妥協するよりもむしろ流浪することを選び、恋愛を諦めることにしか解決方法が見いだせない。二人の成長を比べると、沖田(積極的な行動)も宮本(思慮的な行動)も解決を求める意志ははっきりしている。宮本の場合、問題に対する意識は妄想の形によって奥深く描かれ、強調されている。解決方法には「積極的/消極的な方法」と「思慮的/行動的な方法」との対極がはっきりしている。そこでは、宮本の方が慎重に問題に立ち向かっていることは興味深いところである。行動的な行為(アクション)は少年漫画によく用いられるが、思慮深い行為はもともと少女漫画の特徴である。しかし、思慮した上で問題に立ち向かう宮本が描かれるのは、最近の男性

漫画における剣豪のジェンダー的表現

読者が自分の心理を熟考する人物を好むことを示し、新たな男性像を表現するものと推測される。沖田は積極的（衝動的）に行動するサムライのイメージに適合する。沖田の葛藤は、原因が自分から発生したのではなく、外からの影響によって生じたものが大半である。ただし、沖田は、主に弟子の神谷が危険にさらされるとき、自分の責任だと考えがちで、保護者としての悩みを抱く。宮本の場合も外からの影響（先生や坊主の沢庵の言葉）は悩みの原因になる。

5章の宮本の人物分析では省略したが、宮本は牢獄に捕まえられたエピソードがあり、（他人の影響で）自分の居場所を疑い始める。その自己の居場所への疑問は、二つの漫画ともに興味深い点である。社会には居場所がないため、宮本は逃避的な行動をする。『風光る』に描かれる居場所への疑問としては、神谷が居場所について悩み、それに対して沖田が消極的な役割を果たし、神谷は男性社会（新選組）の中で自分の居場所を見つけることになる。神谷が沖田の代わりに居場所を探るのは、男女の依存関係を示している。神谷は自分の居場所だけでなく、沖田にも自己の居場所をはっきりさせるべきであると考えている。沖田の場合は、社会の中（新選組）にも、女性と共に生きるという形の中にも居場所がありうる。要するに、少女サムライ漫画には性的な問題が多く含まれ、サムライがその悩みや問題を解決するためには女性が必要であると考えられているとも解釈できる。それに対して、少年サムライ漫画においてサムライが居場所を求めるのは自分に対する疑問があるからこそのことである。

④武士としての役割の比較

ここでは、二人の人物が持っている武士道概念を比較し、歴史上の武士道との比較は⑥（歴史との比較）で行う。まず、沖田の武士道は新選組での生活に基づく道徳である。ところが、宮本の武士道は自分に向けられ

ていて、天下無双の名を求める動機に基づいている。二人は武士として、死の覚悟をつねに持っているが、宮本の場合は、その点に関しては複雑な心理的成長が起こる。

元来の武士道としては、武士がお金や誉れのため戦うのは不道徳であるとされる³⁵⁾。宮本は社会に所属しないため、お金にも興味を持っていない。沖田の場合は新選組に所属しているため給料を貰うが、漫画ではお金は沖田の動機に影響を与えてはいない。つまり、二人にはその点で同じ武士道にのっっている。

次に、戦闘時間と場所を比較する。新選組はチャンバラより暗殺が多く、戦闘場面は少数のコマで終わり、『バガボンド』に出てくるような戦略や精神的・身体的発展はほとんど描いていない。戦闘相手の役割も戦いの時間と関係して変化する。戦いの時間が長くなればなるほど、相手の役割も同時に大きくなる。それは宮本と沖田とでは、前者には最大の戦いの相手（佐々木）が存在し、後者にはそれが存在しないという点を比較するだけでも、よくわかる。さらに、『風光る』の戦闘は町が舞台となり、『バガボンド』の戦闘は森林、僧院、お城や道場など、さまざまな場所が舞台となる。沖田と宮本の戦いは、それぞれ所要時間や舞台となる場所が相違しているとしても、二人は武器として刀（または木刀）を好み、鉄砲を武器とすることを拒否するため、古典的な武士のあり方を示している³⁶⁾。宮本と刀との関係については、アニミズムともいべき神道の理念に関係すると推測できる。このアニミズムは単に生物だけにとどまらず、あらゆる物に靈魂が宿っているという信仰である³⁷⁾。それこそが宮本の「理」であり、宮本が環境と調和し、彼の存在は刀と一体化することになる。語られる戦いの時間の長短は、読者の性別と、少年・少女漫画のジャンルに適応させたといえよう。

戦いの時間と場所は人物の社会的地位に影響を受ける。男性読者の好む

漫画における剣豪のジェンダー的表現

サムライは一人で戦い、勝負の相手を中心ににおいて行動する。ところが、女性読者が好むサムライはよくグループで行動する。沖田の武士道はグループに対して向けられるため、自分の感情（恋）を制御する場面がある。それは沖田の「超我」である。宮本は逆に、戦いのシーンにおいては殺気の溢れる「エス」にのっとなって行動するが、その殺気とそれに対する事後の反省は狂人のような妄想にまで発展する。二人ともに戦う場面において行動パターンに変容が起こる。沖田も「エス」にのっとなる行動パターンが出てくる場面がある。それは主に、神谷が危険に陥る場面で、沖田は怒りからかれ、全力で敵を切る場面である。宮本の場合も変容が起こり、「理」の習得とともに荒々しい性格が落ち着き、「エス」をコントロールするようになる。ところが、沖田の場合は成長が描かれていない。

簡単にまとめれば、沖田は武士として社会（新選組）のために行動するが、宮本は自分の成長の為に行動する。その意味では二人ともに自分の想像する理想的なサムライになるため戦い続けている。『風光る』の紹介する武士道は社会生活のなかの道徳として強調されるが、『バガボンド』は武士道の倫理より戦いと戦いから生じる苦悩そのものが中心となる。

⑤性と恋愛

恋愛は小説、歌、映画などで最も多く取り上げられているテーマであり、様々な形で描かれている。沖田と宮本が抱えている女性像と恋愛の形を比較すると、まず、二人ともが伝統的な女性像を持っていることは4章と5章の分析から分かる。その女性像は、女性の幸せは結婚にあり、また、女性は男性と一緒に生き、家を守るために存在するというものである。二人の考え方はともに保守的であり、そこには女性の感情に対する無関心も含まれているといつてよい。沖田と宮本のこうした間違った女性像と、恋愛関係の不器用さは二人の最大の共通点である。ところが、前に述べたよう

に、二人は恋愛の悩みについて、異なる解決法を見つける。

さらに沖田の愛弟子の神谷自身は、宮本の恋愛相手であるおつうと違って、伝統的な女性像を代表していない。神谷の男装の故に、沖田の女性像は変わってくる。だから、神谷は沖田の成長のために重要な役割を果たしている。二人の関係は、神谷が男装しているため、他人にはよく同性愛であるように見える。これは興味深い点である。それは、女性読者の好み（ヤオイのジャンル³⁸）などに合わせた描写であろう。『バガボンド』も、女性人物は色っぽく描かれているため、男性読者の好みに合わせてあるといえよう。

おつうと神谷は登場人物として異なり、主人公に対する役割も異なっている。ところが、『風光る』の中で、逆の性で登場する神谷が登場することは、沖田と神谷はお互いを守り合う意志を持っていることになる。それに基づいた問題も生じるが、その点に関しては7章において論じる。

⑥歴史的文脈の比較

漫画の登場人物の描かれ方とその歴史や伝説における人物像との共通点、また逆にその相違点について、沖田と宮本を比較すると、どのような傾向を示すだろうか。4章および5章からわかったことは、宮本と沖田に関する史料は実はほとんどなく、伝説の方が多く残っていることである。漫画が史実と共通する点は、宮本の場合は流浪の生活を送ったこと、沖田の場合は新選組という組織の歴史の流れの中での興亡である。二人の描き方は史実というより伝説との共通点の方が多く、たとえば宮本が戦いに明け暮れたこと、沖田が明るい性格の持ち主として描かれていることなどはそうである。

ここではさらに、それぞれの人物の武士道が実際の日本の歴史における武士道とどれくらい相即しているかという視点から沖田と宮本を対比して

漫画における剣豪のジェンダー的表現

みる。武士道の研究では、今なお新渡戸稲造の『武士道』は重要な文献である。新渡戸によれば、武士道とは武士を中心した封建社会の秩序に基づいた倫理の基準である。武士道はヨーロッパの騎士道に似ていて、ともに中世の封建社会から生まれたことが両者の最大の共通点である³⁹⁾。武士道は倫理であるが、しかし、その詳細な内容を記す文献は稀で、非常に断片的である。武士道が発生した時もよく知られていず、12世紀の源頼朝の時代、將軍制度が強化されていく時期にできたと推測される。武士道の内容が時代とともにどのように変容していったかという点もよく知られていない。しかし、17世紀以降日本社会に大きな影響力をおよぼす儒教が以後の武士道のあり方にも大きく影響を与えたことははっきりしている。江戸時代の武士道を論じる記述としては、18世紀初めに佐賀藩の山本常朝によって書かれた『葉隠』は有名である。その中で山本は武士道に関する逸話を示しながら、武士道とは死ぬことであると定義して、さらに主君への忠義も強調する⁴⁰⁾。

『バガボンド』は戦国末期と江戸初期が舞台であり、『風光る』は幕末時代が舞台となっているため、当然、武士道の理念が異なってくる。江戸時代に重視された儒教は上下関係を大切し、武士道では忠義が根本となる⁴¹⁾。

沖田と宮本の武士道で興味深いのは仇討ちである。新渡戸の『武士道』によれば、刑法のない時代、武士は仇討ちを行うことによって正義を果たすことになる。仇討ちは犯罪ではなかったのである。伝説では、宮本は仇討ちのために吉岡一門を滅ぼそうとするが、漫画の宮本はその目的をもっていない。一方で、沖田は仇討ちに関係がないはずなのだが、神谷が仇討ちのために新選組に入るため、『風光る』の中では仇討ちが主題にかかわってくる。仇討ちを果たす男装少女たちはロマンチックな雰囲気を作り出すので、こうした物語は昔から伝わっていると新渡戸は述べている。その視

点からすれば、神谷は架空の人物であるが、完全に新しい虚構というわけではない。ところが、沖田と男装する愛弟子との関係は、歴史からかけ離れている。歴史上の武士道は、儒教の支配の理念に従い、支配者や上官—武士—女性というヒエラルキーができるために、男性（サムライ）は上官に支配され、女性は男性に支配されるが、逆に下の者が上の者を守り、女性が男性を守り、サムライは主君を守ることになっている。女性はけっして男性に守られていない⁴²⁾。これはヨーロッパの武士道とは全く逆である。つまり、沖田は上官との関係において、歴史的な武士道の理想に従うが、女性を守りたがる意志を持っているため、新しい架空の武士道（ヨーロッパの騎士道に似た武士道）を作り出していることになる。

7. 歴史的事実との差およびターゲットとなる読者からの影響

①読者と登場人物との一体感の基礎

読者のジェンダーによってサムライの描写に差異が生じる原因は、社会と社会の変容にあると考えられる。ここでは読者が登場人物と一体化できるということが基礎となる。読者が一体化する人物は『バガボンド』では宮本である。吉川の『宮本武蔵』は戦争時代に出版されたため、吉川の描く宮本は身体的な強さをもった優れた剣士であるとして憧れの男性像であった。吉川自身は体が弱かったため、逆に強い宮本像と自己を一体化できたと自ら述べている⁴³⁾。その宮本の男性像は読者の代償にもなるであろう。『バガボンド』の宮本は武力をもつだけでなく、成長の過程で人殺しを疑問視するようになるからこそ、現代の若い男性にとっても一体化しやすい人物なのだと推測できる。

読者が『風光る』の中で一体化する人物は沖田自身ではなく、神谷である。少女戦士（warrior girls）は（少女）漫画によく出てくる。宮崎駿の『風の谷のナウシカ』や武内直子の『美少女戦士セーラームーン』などが

そうである。それらの少女戦士の特徴は戦士として戦うだけではなく、優しさと理解力を持つことであり、神谷の場合もそれは同様である。それに対して、男性読者が好む英雄は攻撃的な性格のある人物である。『風光る』の場合は、サムライの荒々しいイメージは、沖田が中性的に描かれているからだけでなく、神谷の影響によっても、柔らかなものに変容している。少女漫画では、男性人物は主人公として登場することは普通にはないが、それは男性が「清さ」を持っていないためであると推測されている⁴⁴⁾。この説に依拠して私見を述べれば、神谷と沖田とは『風光る』の中の対等の主人公であるため、沖田の主人公としての「清さ」の欠落は神谷によって補正されるのだと考えられる。読者が一体化できる人物は男装する女性の主人公であり、その設定によって女性は男性の役割に近づいていくと結論づけられる。

読者のサムライとの一体化は、わずかな時間の現実逃避とも考えられる。主に少女漫画の場合、その一体化は新たな「Ritterlichkeit」（ドイツ語で「騎士らしさ」の意味、「武士らしさ」の意味でも使えよう）への望みを表現するだろう。『風光る』は、現代からそれほど離れていない、手でつかめそうな過去を語っていて、歴史をロマンチック化している。70年代までのほとんどの少女漫画は日本でなく、ヨーロッパを舞台としていた⁴⁵⁾。

『風光る』は、他の男装少女漫画、特に手塚治の『リボンの騎士』と強く関係しているが、手塚は宝塚で幼年時代を過ごしていて、この『リボンの騎士』は彼が親しんだ宝塚歌劇から大きな影響を受けている。宝塚歌劇の俳優はいうまでもなくすべて女優だが、しかし男女の二つの性別を演技することになる。その中でも男装する「男役」にファンは憧れを抱く。それは、最初の男装少女漫画である『リボンの騎士』の構想にも非常に影響を与えたと思われる。ところが、90年代に登場した『風光る』は二つの点でそれまでの男装少女漫画とは異なっている。まず、女性（神谷）は男装す

ることを本人の自由意志で決定した。二つ目は、男装する女性と平等なレベルで、男性（沖田）が主人公となっている点である。つまり、沖田は女性の神谷からみた視点で描写されているのである。読者が一体化することのできる人物への憧れは、読者が求める理想の男性らしさへの憧れの基礎となる。従って、宮本は男性読者がもつ理想の男性像であるのに対して、沖田は女性読者が憧れる男性像であるといえる。

さらに、登場人物の悩みとそれを克服していく成長についていえば、男性読者、主に社会に入っていく直前・直後の若者は悩みが多いため、悩みの多い宮本と一体化しやすいだろう。特に宮本の「男泣き」（それは失敗後の反省と回復のためである）は以前では考えられなかったことかもしれないが、現在の男らしさとは背反せず、逆に人間らしい、理解しやすい男性像を作り出すことになる⁴⁶⁾。つまり、読者は宮本の心理的状态が理解できるからこそ、一体化できるといえよう。宮本はサムライの男性像であると同時に、現代の変容しつつある男性像（下掲②参照）にも結び付いている。また、読者は漫画にでてくる宮本の武士道（社会の一部でなく、自分で生きることができる、大自然と調和できる武士道）に、現代社会で失ってしまった理想を重ね合わせて憧憬するのである。

②身体的力と美学

どのような男性像に憧れを抱くかは、身体の力や美学の在り方とも関係し、二つの漫画の中に紹介される男性像の相違点の拠ってくることを説明する。宮本がスポーツ選手のような筋肉のたくましい男らしさを代表するのは何故だろうか。また逆に沖田が同じ武士でありながら、中性らしい（アンドロジナスな）男性像を表現するのは何故であろうか。まず、宮本の身体的な男らしさは、少年漫画や映画のヒーローと同じである。筋肉を強調する極端な例は鳥山明の漫画の『ドラゴンボール』である。身体的な

漫画における剣豪のジェンダー的表現

力の強調は実際の生活の中での体力不足の補償であるといえよう。その上、宮本のストイックな生き方は現在のトレンド（すべての面での過剰，利己心，そこから生じる危険，体重過多や性病など）と異なるからこそ，理想的な生き方だと考えられる⁴⁷⁾。井上は宮本のストイックな生き方を強調することによって，現代の人々が身体をおろそかにしていること（運動不足など）を意図的に指摘し，身体の可能性を掲げるのである。

『風光る』の沖田のアンドロジナスであり，かつフェミニンな美学は，日本のアイドル文化（木村拓哉などジャニーズ所属のタレント）から影響を受けていると思われる。現在のマスコミが紹介する男性像の特徴は女性の欲求に応じてつくられていることである。ところで，そのフェミニンな美学が一般の男性の理想ともされるようになったのは新しいことであるが，美学としては必ずしも新しいものではない。江戸時代にも主に歌舞伎の中で美しい男性が憧れの対象であったが，その時の美しい男性の美学は今と違って，男性がつくった男性像であった⁴⁸⁾。現代のフェミニンな男性像はそれとは違い，女性が守りたくくなるようなカワイらしい男性像である。しかし，沖田は美形にも関わらず，天才的な剣豪であるため，律儀に忠誠を尽くし，女性も大切に見守る優しさも持っている。

③道徳と論理

武士の特徴は戦乱や決闘にあるはずだが，漫画の宮本と沖田が持つ道徳も現在の平和な社会に関連すると仮定し，社会的視点から論じてみる。『バガボンド』は吉川の小説を元にして描かれたが，男性学者である熊田によれば，『バガボンド』はただのコピーではなく，井上の描いた宮本はその苦悩と疑問視によって戦争的な行動（人殺し）を批判している。その道徳は第二次世界大戦下の軍国主義の時代に出版された『宮本武蔵』とはまったく違う。それは，①にも言及したように，現在の若者の倫理と関

心の変容をも示すことになる。ところが、宮本は現段階では自分の身体的発展にしか役に立たない人殺しを続けることによって、結局は自分の良心に従うことができない。自分の成長に重点をおく生き方は漫画にも小説にも以前からあり、それは現在のスポーツやヤクザを描く映画・漫画などに出てくる行動パターンにも似ている⁴⁹⁾。つまり、井上は以前からあった理念を漫画に取り入れているが、そこに批判的な視点も許容している。その逆に、少女サムライ漫画ではサムライが理想化され、それを批判する視点は弱い。沖田の場合の批判的に考えられるところとその抛るところについては、次に述べる。

④保護者としての役割の矛盾

『風光る』が紹介する武士道の中では、男女はお互いを守りたがるものの、沖田と神谷の気持ちはよくぶつかり合い、しばしば矛盾が生じる。ここで、読者が一体化する人物は沖田ではなく、神谷であることも改めて指摘するとともに、保護者である沖田に対する神谷の役割を分析することにする。

『風光る』より以前の男装少女漫画である手塚治の『リボンの騎士』や渡辺まさこの『お山のおくの物語』などの主人公は「優しい」と「強い」という特徴で描かれているが、他の漫画の女性像は「清らか」であると定義される。『風光る』は以前の漫画と異なり、男性の主人公も男装少女の主人公も「優しい」と「強い」が特徴であり、それは興味深い新しい視点といえよう。

それらの少女の主人公は、フェミニスト的な視点を含有する。ところが、神谷は愛しい人のため自分の命を犠牲にする覚悟も持っている。日本の封建社会の時代にも、武士階級に生まれた女性は命をかけて男性を守る覚悟を持っていた。それは武士道の中の儒教の征服（隷属）の倫理の一部であ

る⁵⁰⁾。古事記に描かれる弟橘媛と大和武尊（海が荒れたときに舟に乗っている夫の大和武尊を守るため、弟橘媛は海神を鎮めようと、自分の命を犠牲にする）や説経浄瑠璃の安寿と厨子王の物語（奴隷としてつかまえられてしまった兄弟の物語であり、弟が逃亡できるように姉は自殺する）は女性の征服を語る有名な物語である。『風光る』やその他の漫画やアニメーション（『もののけ姫』など）にも同じ覚悟を持った少女人物が存在するといつてよく、はなはだ伝統的な理想が「新しいフェミニスト的な戦士ファンタジー」に包まれて隠されているといつてよい⁵¹⁾。ところが、『風光る』には新たな一面が加わる。それは、相手方の男性である沖田にも神谷と同じく、愛しい人を守るために命をかけるという覚悟があることである。

女性を守るという男性像は、ヨーロッパのメルヘンに由来し、宝塚歌劇でもしきりに取り上げられ、さらに（多数の少女漫画の舞台がヨーロッパであるため）少女漫画にも影響を与えた。その男性像は若い女性の希望を反映していると考えられる⁵²⁾。そのために当然、『風光る』では日本とヨーロッパの思想が対立し、それによって矛盾が生じる。その矛盾はそのまま現在の女性の社会的な役割に関する混乱を意味していよう。

その一方で、少年サムライ漫画の『バガボンド』では保護者の問題は出て来ない。宮本は流浪の生活を続けるために女性との交際を避け、愛しいおつうは安全な場所（他所）にいて欲しいという思いと一緒に流浪することも、一緒に留まることもない。つまり、宮本は女性を守る覚悟がない。これは非常に伝統的な男性の描き方である。それは吉川の小説も同様であり、恋愛関係に躊躇する宮本は、恋愛に失望してしまった現在の男性に勇気を与えることになる熊田は推測する。宮本は自分に魅力が足りないことが原因でなく、自由な生活を優先するために恋愛を断念する—それは男性読者が同感できる点なのである⁵³⁾。要するに、保護者の役割については、沖田の方が伝統的なサムライのイメージから離れ、新しい保護者のイメー

ジを作り出しているといえよう。

⑤社会からの逃げ道

宮本の一匹狼主義は自由への欲求を表現する。それは義務と束縛の多い現在社会のトレンドとは異なっていて、男性読者の現実逃避（escapism）を表現すると考えられる。『風光る』はその反対の傾向を示し、女性が就職し社会に入りたい欲求を示す。同じ傾向は宝塚歌劇の男役からでも分かる。男役は理想の男性像を示すのではなく、女性の絶望的な存在からの逃げ道を意味するだろう。実際に女性である男役は、女性の絶望を示すだけでなく、それが現実にはありえないほど理想的であるため、理想の男性は実際に存在しないということも表現していることになる。ところが、『風光る』の場合の主人公は男装している神谷（女性）だけでなく、沖田（男性）でもあるため、女性読者は現在の社会ではなくなった男性像の理想を（架空の）歴史の男性像に再発見しようとしていると考えられる。神谷の入り込んだ男性社会の特徴は建前である。女性読者はその武士道に似た建前の中で理想の男性像を見つけたと言えよう。その男性像は現実とは異なっていて、少女サムライ漫画では、性的欲求が過度に抑制されている。それは大人の世界からの逃避でもあろう。

それに対して、少年サムライ漫画は反対の傾向を示す。社会から逃げたいという欲求は現在の社会の厳しさ（就職及び、日常の束縛など）に由来し、宮本は社会から距離をとる心構えを示すからこそ、男性読者を引きつけている。

人々の価値観の変容とサムライのジャンルの変容との関係は、忠義で有名になった忠臣蔵の比較によっても分かる。忠臣蔵が代表する男性像は長い間、優勢な男性像であったはずだが、現在ではただの時代錯誤となった。忠臣蔵が若い男性に魅力を失いつつあるのは、公益のための自己断念とい

うスローガンが不変妥当ではなくなったためであり、逃避主義者である宮本の方が男性読者の心に道を開くことになった⁵⁴⁾。その逆に、忠臣蔵のように忠義を理想に持ち、新選組に忠誠心を持ち続ける沖田は宮本とはまったく反対の方向、つまり社会性への傾向を強調し、それが女性読者の関心をとらえていることになる。

社会からの逃げ道は、二つの漫画ともに取り上げられているが、居場所に関する疑問もそれに結びついて生じてくる。居場所については少女漫画ではしばしば取り上げられ、それは家族や恋愛を中心にした問題となるのだが、一般的には居場所は家であると定義されている⁵⁵⁾。『風光』でも、居場所の問題が積極的に取り入れられ、神谷の寓意（アレゴリー）の中で示されている。それは、沖田は風で、近藤局長は大空であると寓意的に述べているシーンであり、その中には儒教の忠義の倫理が隠されていると解釈できる⁵⁶⁾。ここでの序列をいえば、一番下は弟子の神谷であり、つまり女性である。しかし、神谷の居場所は家庭ではなく、社会であるため、ここには新しい視点が含まれている。もっとも興味深いのは、居場所とは少女漫画のみの問題であるとされていたのが、90年代になって、少年漫画（『新世紀エヴァンゲリオン』など）においても徐々に問題にされるようになったことである。『バガボンド』においても居場所が問題となっているのは、少年サムライ漫画としては新しい現象である⁵⁷⁾。つまり、居場所の問題に関しては、ジェンダーの境界線は消えつつあると言えよう。

⑥契約的考察

少年サムライ漫画と少女サムライ漫画におけるサムライの描写の差異は社会の在り方と少年・少女漫画の一般的なジャンルの在り方に結びついている。読者がいかに登場人物に一体化するかが登場人物の表現のされ方の差異の基礎になっている。読者が一体化する人物は、まず『バガボンド』

の場合では、主人公の宮本である。宮本の代表する身体的な強さのある男性像は吉川の小説に基づきつつ、男性読者の不満の補償を許容する。『風光る』の場合、一体化を許す人物は沖田ではなく、男装する神谷である。神谷は女性読者の現在の社会や男性に対する希望と男性への批判を表現する。それは他の男装少女漫画とも強く関わり、宝塚歌劇とも繋がっている。宮本は男性読者がなりたがる男性像であり、沖田は女性からみた憧れの男性像を代表するだろう。二人の男性像は、社会の変容、主に男性のジェンダー的な境界線の変容とそれに関する女性の不安を示すことになるが、少年サムライ漫画と少女サムライ漫画において、サムライの男性像をめぐる、男性読者・女性読者の希望を取り入れながら、異なる問題解決を図っているのである。

8. 結 論

最後に、問題提起を改めて掲げ、その結論付けを行う。「歴史上の剣豪のイメージは、サムライ漫画において、その読者の性別によって影響を受けるかどうか。男性と女性と性別の異なる読者を対象にした場合、描写にはどのような違いが生じ、歴史上の剣豪とどれほど正確に対応しているのか」というのがこの論文の問題提起であった。

最初の問題点については、二つの漫画の剣豪のイメージは読者の性別（ジェンダー）に影響を受けていると結論づけることができる。

『バガボンド』も『風光る』もサムライ漫画であるが、そこでの武士道の定義は対立する。『バガボンド』において武士道は個人の自由（フロイトのエスを含む）を意味し、『風光る』においては社会的で、その社会（新選組）のために感情を抑圧する建前を意味する。その差異は男性読者の宮本への人気と女性読者の沖田への人気の要因であると結論づけられる。

『バガボンド』と『風光る』が紹介する男性像について、身体的力を強

漫画における剣豪のジェンダー的表現

調する宮本は、中性（アンドロジナス）にみえる沖田と対立し、その差異は二つの漫画の内容の差異とも相関する。つまり、二人はアクション・ストーリーとロマンスを表現する人物に相当する。

二人の人物の描写は歴史上の人物より小説や伝説の方が元になっていた。とはいえ、『風光る』は歴史の記録に相対的に従っていて、架空の人物の神谷が歴史的事実の進行の妨害をしないようにストーリーは展開する。『バガボンド』の場合、歴史および既存の伝説上の宮本と漫画の人物との最大の違いは社会的隠遁（いんとん）と父親の仇討ちが省略されていることである。『バガボンド』は当初、吉川の『宮本武蔵』を元に描かれたが、ストーリーが進むに連れて、小説と異なる傾向を示し、漫画の宮本には人殺しに対する批判的視点が生じるようになる。それは『バガボンド』が戦争時代に書かれた『宮本武蔵』より、戦争を嫌う現代の社会により強く結び付いているためである。

サムライのジャンルは一般的に男性向けのジャンルであると思われがちであるが、『風光る』は少女マンガにおいてもサムライが人気のあるジャンルであることを証明している。二つの漫画のストーリーは少年漫画と少女漫画のそれぞれのジャンルや特徴を踏まえつつ、それがそれぞれの武士の描写に影響を与え、読者のもつ一体感にまで関係する。少女漫画では男性が主人公としてはふさわしくないため、『風光る』は男装少女漫画の形式をとり、第二の主人公を取り入れて男女平等を提案する。女性読者は男装の登場人物によって武士の世界に親しむことができ、それによってサムライは男性読者が独占するジャンルであるというイメージを弱めたといえよう。

サムライの男性像について、宮本と沖田とは対立する男性像を表現し、男性読者はサムライのなかに理想の自分を、女性読者は憧れの男性を認める。その描写は読者に現実逃避を許容し、『バガボンド』においては社会

的制限のない自由な世界、『風光る』においては性別役割を混乱させる遊びと一種の「下克上」、さらにはそれによって生じる矛盾とが読者を引きつける。その読者を引きつけるそれぞれの魅力こそがそれぞれの描写の差異の要因であると結論することができよう。つまり、現在のサムライ漫画人気の特徴としてはまず、女性読者が増えた点が挙げられる。その傾向が産み出したものこそ、サムライ少女漫画である。サムライの描写のジェンダー的な差異を探究した本論文の結論は、描写はターゲットとなる読者の好みに適応しており、たとえそこに差異があったとしても、沖田と宮本の双方の人物像がともに、読者が現在社会において満たしえないものを「非現実の世界」で満たそうとしているのだと結論づけることができる。

注

- 1) 注：本論文では、人や登場人物の名前を全て名字で述べる。宮本武蔵も一般的に知られているように「武蔵」ではなく、「宮本」と書いた。名字のない登場人物のみは名前で述べる。
- 2) 宮本武蔵『五輪書』渡辺一郎校注、岩波書店、1985年、10頁。
- 3) 『五輪書』には巖流佐々木小次郎の名前はいつさいも出て来ない。宮本前掲文献、1985年。
- 4) 宮本 前掲文献、26-29頁。
- 5) 本章は下掲の文献を使用した：稲垣史生「宮本武蔵」相賀徹夫『大日本百科事典』小学館、1971年、17巻、220頁。島田貞一「宮本武蔵」、国史大辞典編集委員会：『国史大辞典. 13巻』吉川弘文館、1992年、505-506頁。Harris, Victor 「Einführung」 Jürgen Bode, Siegfried Schaarschmidt 『Das Buch der Fünf Ringe. Die klassische Anleitung für strategisches Handeln』 Ullstein, 2005年、33-54頁。宮本武蔵、前掲文献、1985年。
- 6) Harris 前掲文献、19頁。
- 7) 井上雄彦 3巻、1999年c、22章 [2-3頁]。井上 12巻、2001年d、116章 [19頁]。井上 16巻、2003年a、125章 [10頁]。井上 21巻、2005年c、180章 [24頁]。井上 30巻、2009年、268章 [6頁]。注：分析の対象である『風光る』

漫画における剣豪のジェンダー的表現

- と『バガボンド』との脚注は非常に多いが、読みやすくするためにはこれから、著者、出版の年（一年に1巻以上の出版された場合は年の後でa, b, cを書いた）と頁（『バガボンド』では章と章の中の頁を書いた）のみを脚注に載せた。その他の詳細は省略するため、参考文献を参照のこと。さらに、本論分は第2回であるため、図の番号は第1回の続きで図7から始まる。
- 8) 井上 24巻, 2006年c, 207章 [4-24頁]。井上 1巻, 1999年a, 9章 [2頁], 井上 7巻, 2000年c, 63章 [4-10頁]。今井洋一「インタビュー・バガボンド, 最終回へのカウントダウン」『Switch. 特集: 井上雄彦. バガボンド, 最後の頂きへ向かう旅. Vol. 24 (= No. 12, 2006年12月)』, 2006年, 42頁。
 - 9) 井上 21巻, 2005年c, 181章 [15頁]。
 - 10) 井上 1巻, 1999年a, 2章 [10-12頁]。井上 22巻, 2006年a, 194章 [8-9頁]。井上 25巻, 2007年a, 224章 [18頁]。
 - 11) 井上 29巻, 2008年b, 257章 [4-22頁]。井上 30巻, 2009年, 256章 [1-4頁]。
 - 12) 井上 7巻, 2000年c, 61章 [6-7頁]。
 - 13) 井上 3巻, 1999年c, 25章 [11-13頁]。
 - 14) 井上 6巻, 2000年b, 50章 [15-17頁]。井上 6巻, 2000年b, 51章 [5-6頁]。
 - 15) 井上 1巻, 1999年a, 1章 [1-32頁]。井上 3巻, 1999年c, 28章 [15頁]。井上 5巻, 2000年a, 42章 [4頁]。井上 26巻, 2007年b, 225章-27巻, 2007年c: 239章。
 - 16) 井上 30巻, 2009年, 261章 [8-15頁], 264章 [13頁]。
 - 17) 井上 11巻, 2000年c, 68章 [1-10頁]。
 - 18) 井上 21巻, 2005年c, 183章 [14-15頁]。
 - 19) 井上 22巻, 2006年a, 189章 [2-3頁]。
 - 20) 井上 4巻, 1999年d, 38章 [11-17頁]。井上 5巻, 2000年a, 49章 [7頁]。井上 10巻, 2001年b, 94章 [9-10頁]。井上 2巻, 1999年b, 13章 [16-17頁]。井上 27巻, 2007年c, 236章 [4-5頁]。
 - 21) 井上 24巻, 2006年c, 208章 [6-24頁]。
 - 22) 井上 28巻, 2008年a, 250-251章。井上 29巻, 2008年b, 255-258章。
 - 23) 井上 27巻, 2007年c, 240章 [2-3頁]。井上 24巻, 2006年c, 208章 [19]。
 - 24) 井上 1巻, 1999年a, 3章 [14-15頁]。井上 6巻, 2000年b, 53章 [20頁]。

- 井上 11巻, 2001年c, 105章 [13-14頁]。井上 12巻, 2001年d, 109章 [15頁]。
井上 13巻, 2002年a, 125章 [11頁]。井上 16巻, 2003年a, 125章 [11頁]。
井上 22巻, 2006年a, 197章 [8-9頁]。
- 25) 井上 4巻, 1999年d, 33章 [1頁]-34章 [19頁]。井上 11巻, 2001年c, 105章 [13-14頁]。井上 29巻, 2008年b, 254章 [1頁]。
- 26) 井上 24巻, 2006年c, 210-212章。
- 27) 今井 前掲文献, 41-42頁。
- 28) 今井 同上。井上 24巻, 2006年c, 215章 [14頁]。井上 28巻, 2008年a, 251章 [21-26頁]。井上 30巻, 2009年265章 [2-3頁]。
- 29) Harris 前掲文献, 37頁。Nitobe Inazo (新渡戸稲造) 『Bushidō. Der Ehrenkodex der Samurai. 10. Auflage.』 Kim Landgraf (ドイツ語翻訳), Anaconda. 2006年, 104-105頁。
- 30) 井上 1巻, 1999年a, 9章 [19-21頁]。井上 1巻, 1999年a, 10章 [1-11頁]。井上 9巻, 2001年a, 81章 [6-7頁]。
- 31) 今井 前掲文献, 41-42頁。井上, 33巻, 2010年, 288章 [1-5頁]。
- 32) Taga Futoshi (多賀 太) 「Der Wandel von Geschlechterrollen und männliche Konflikte. Eine Biographiestudie mit jungen Männern in Japan」 (ドイツ語翻訳 Petra Buchholz) Susanne Kreitz-Sandberg 『Jugendliche in Japan und Deutschland. Soziale Integration im Vergleich』 Leske + Budrich, 2002年181-203頁。
- 33) Konecny, Edith, Maria-Luise Leitner 『Psychologie』 Braumüller, 2000年, 183-185頁。
- 34) Sugimoto Yoshio (杉本良夫) 『An introduction to Japanese society. Second Edition』 Cambridge University Press, 2003年, 28-32頁。
- 35) Nitobe 前掲文献, 83頁。
- 36) 渡辺 18巻, 2005年a, 139頁。井上 24巻, 2006年c, 213章 [10-13頁]。
- 34) 藤森かよ子 『Some Aspects of Japanimation: To Know Desires and Dreams of Japanese People』, 桃山学院大学 (講義のハンドアウト) 2007年, 8-9頁。
- 38) ヤオイは女性のための男性同性愛の漫画のジャンルである。ボーイズラブとも言う。
- 39) Nitobe 前掲文献, 20-22頁。

漫画における剣豪のジェンダー的表現

- 40) 山本博文『武士道のことがよくわかる本. 日本人なら知っておきたい』中経出版, 2012年, 108-115頁。
- 41) Van Ess, Hans 「Konfuzianismus: Prägende Kraft in Ostasien?」 Sepp Linhart, Susanne Weigeling-Schwiedrzik 『Ostasien 1600-1900. Geschichte und Gesellschaft』 Verein für Geschichte und Sozialkunde und Promedia Verlag (=Edition Weltreligionen Band 10), 2004年, 198-211頁。
- 42) Nitobe 前掲文献, 104-119頁。
- 43) 熊田一雄『男らしさという病? ポップ・カルチャーの新・男性学』風媒社, 2005年, 8-10頁。
- 44) Nakamura Karen (中村 かれん), Matsuo Hisako (松尾寿子) 「Female masculinity and fantasy spaces: transcending genders in the Takarazuka Theatre and Japanese popular culture」 James E. Roberson, Nobue Suzuki 『Men and Masculinities in Contemporary Japan. Dislocating the salaryman doxa』 RoutledgeCurzon, 2003年, 71-73頁。
- 45) Maderdonner, Megumi 『Shōjo manga no sekai. Japanische Mädchen-Comics als Spiegel der Mädchenwelt』 ウィーン大学博士論文, 1997年, 91頁。
- 46) 熊田 前掲文献, 40頁。
- 47) 熊田 同上, 25頁。
- 48) Miller 前掲文献, 37-38頁。熊田 同上, 44頁。
- 49) 熊田 同上, 6-7頁。
- 50) Nitobe 前掲文献, 116-118頁。
- 51) 藤森 前掲文献, 32頁。
- 52) 藤森かよ子, 同上, 12頁。
- 53) 熊田 前掲文献, 6頁。
- 54) 熊田 同上, 27頁。
- 55) 藤本由香里『私の居場所はどこにあるの? 少女マンガが映す心のかたち』朝日文庫2008年, 4頁。
- 56) Nitobe 前掲文献, 73-119頁。Van Ess 前掲文献, 198-211頁。
- 57) 藤本 前掲文献, 4-5頁。
- 58) 注: 『バガボン』では枚数が書かれていないため, 引用の祭にはマンガの章の番号と章の中の枚数を括弧で追加する。

参 考 文 献

- 稲垣史生「宮本武蔵」相賀徹夫『大日本百科事典』小学館，1971年，17巻，220頁。
- 今井洋一「インタビュー．バガボンド，最終回へのカウントダウン」『Switch．特集：井上雄彦．バガボンド，最後の頂きへ向かう旅．Vol. 24 (= No. 12，2006年12月)』，2006年，41-42頁。
- 熊田一雄『男らしさ Bib という病？ポップ・カルチャーの新・男性学』風媒社，2005年，6-44頁。
- Konecny, Edith, Maria-Luise Leitner 『Psychologie』 Braumüller, 2000年，183-185頁。
- 島田貞一「宮本武蔵」，国史大辞典編集委員会：『国史大辞典．13巻』吉川弘文館，1992年，505-506頁。
- Sugimoto Yoshio (杉本良夫) 『An introduction to Japanese society. Second Edition』Cambridge University Press, 2003年，28-32頁。
- Taga Futoshi (多賀 太) 「Der Wandel von Geschlechterrollen und männliche Konflikte. Eine Biographiestudie mit jungen Männern in Japan」(ドイツ語翻訳 Petra Buchholz) Susanne Kreitz-Sandberg 『Jugendliche in Japan und Deutschland. Soziale Integration im Vergleich』Leske + Budrich 2002年181-203頁。
- Nakamura Karen (中村かれん), Matsuo Hisako (松尾寿子) 「Female masculinity and fantasy spaces: transcending genders in the Takarazuka Theatre and Japanese popular culture」James E. Roberson, Nobue Suzuki 『Men and Masculinities in Contemporary Japan. Dislocating the salaryman doxa』RoutledgeCurzon, 2003年，71-73頁。
- Nitobe Inazo (新渡戸稲造) 『Bushidō. Der Ehrenkodex der Samurai. 10. Auflage.』Kim Landgraf (ドイツ語翻訳), Anaconda. 2006年，73-119頁。
- Harris, Victor 「Einführung」Jürgen Bode, Siegfried Schaarschmidt 『Das Buch der Fünf Ringe. Die klassische Anleitung für strategisches Handeln』Ullstein, 2005年，11-54頁。

漫画における剣豪のジェンダー的表現

藤本由香里『私の居場所はどこにあるの？少女マンガが映す心のかたち』朝日文庫2008年、4-5頁。

藤森かよ子『Some Aspects of Japanimation: To Know Desires and Dreams of Japanese People』, 桃山学院大学（講義のハンドアウト）2007年、8-32頁。

Maderdonner, Megumi『Shōjo manga no sekai. Japanische Mädchen-Comics als Spiegel der Mädchenwelt』ウィーン大学博士論文、1997年、91頁。

宮本武蔵『五輪書』渡辺一郎校注、岩波書店、1985年、9-29頁。

Miller, Laura「Male beauty work in Japan」James E. Roberson, Nobue Suzuki『Men and Masculinities in Contemporary Japan. Dislocating the salaryman doxa』RoutledgeCurzon, 2003年、37-38頁。

山本博文『武士道のことがよくわかる本。日本人なら知っておきたい』中経出版、2012年、108-115頁。

Van Ess, Hans「Konfuzianismus: Prägende Kraft in Ostasien?」Sepp Linhart, Susanne Weigeling-Schwiedrzik『Ostasien 1600-1900. Geschichte und Gesellschaft』Verein für Geschichte und Sozialkunde und Promedia Verlag (=Edition Weltreligionen Band 10), 2004年、198-211頁。

分析対象となる参考文献⁵⁸⁾

井上雄彦『バガボンド』講談社、1巻、1999a～33巻、2010年。

渡辺多恵子『風光る』小学館、2巻、1997～26巻、2009年。

Samurai Manga and Gender an Analysis Based on “Kaze hikaru” and “Vagabond”

SCHMIDT Claudia Caroline

Samurai is an important genre in Japanese entertainment media, such as books, television, and even manga. It has been a genre especially for male target groups for a long time, but during the last decade, there has been a tendency for samurai manga to focus on female target groups. In my research, I focus on the difference between the image of samurai in manga for male and female target groups, and afterwards I describe the possible social reasons for those differences.

For the analysis I chose Okita Sōji from Watanabe Taeko’s Manga “Kaze hikaru” as an example for a samurai described for a female target group, and for a male target group, I chose Miyamoto Musashi from Inoue Takehiko’s “Vagabond” as a representative samurai.

I mainly follow Yomota Inuhiko’s method as presented in his work “Manga genron”, adding a focus on the keywords social life, love and life as swordfighter, especially analysing problems and solutions concerning these themes.

Through the analysis I found some interesting answers. While the image of Okita in “Kaze hikaru” obviously is adapted to classical genres for female readers (the keywords love and social life are the main points and the story itself is similar to high-school campus stories), Miyamoto’s description focuses on his work of building a strong self, especially by countless action scenes. The two represent a different ideal of masculinity, on the one side showing an Okita who is influenced by the typical effeminate male aesthetics

漫画における剣豪のジェンダー的表現

of Japanese male pop idols—an image mainly created by aiming towards female fans. And on the other side there is a Miyamoto representing a classical warrior image, which can be interpreted as a counter flow to the new male aesthetics.

Yet, Miyamoto's warrior journeys and his life far from civilization can also be seen as criticism of young men's reaction to the growing demands of their working lives, but also in their daily lives as some kind of escapism from their daily lives. In contrast to Miyamoto, Okita shows an exaggerated image of loyalty, especially to his troops' leaders and his *protégée*, a girl dressed up as boy who joins his samurai troop. Especially his relationship to his *protégée* shows the uncertainty of young women concerning gender constructs and shows the desire of women to take part in social life or even to create history. In summary, it is obvious that the image of the samurai is fit to the gender of the target groups and it seems as if it gives the reader an entertaining possibility to compensate for the limits of everyday live.